

埼玉県令白根君碑

郡県制ノ始マリ司牧ノ官ヲ建テ銳意治ヲ図ル、或ハ喜功好事ノ弊ヲ免レス、独埼玉県令白根君退然自守、敢テ異常可喜ノ事ヲ為サス、其ノ国家ノ大計生民ノ利害ニ至リテハ深思熟慮、知テ言ハサルナク言テ尽サ、ルナシ、人亦其心ヲ諒シ、其ノ言ヲ納ル、大久保内務卿嘗テ人ニ謂テ曰ク、埼玉県令ノ民政ヲ陳スル殆ント人ヲシテ聞クヲ樂ハサラシム、然トモ其ノ言ヲ用テサレハ肯テ退カス、カクノ若キ人之ヲ人民ノ代議士ト謂テ可ナリト、埼玉管スル所旧藩十有八封土相接スレトモ、地其政ヲ異ニシ邑情ヲ同クセス、民俗豪俠ニシテ健訟最モ難治ト称セラル、君佐貳ヨリ長官ニ陞リ在職十二年、寛厚待物法令画一、是ニ於テ風移リ俗改マリ獄訟漸ク熄ム、其ノ心ヲ民事ニ竭スノ概其ノ建白スル所ヲ觀テ知ル可キナリ、明治九年天子東巡シ給フヤ、君駕ヲ導キ幸手駅ニ至ル、謁ヲ賜フ上親シク問ヒテノタマハク、比來貢賦本色ヲ廢シテ折色ヲ徵ス、民情如何、君對ヘテ曰ク、税ヲ兩ニシ折色ヲ徵スルハ下民包裹運搬ノ勞ヲ免カレ事ニ於テ便ナリ、然トモ農家八尺寸以上皆力作シテ獲ル所ナリ、故ニ金貨ノ入ル秋獲ノ日ニ在リ、今一時ニ米ヲ糶リ以テ錢ニ換フルトキハ、則米価頓ニ賤ク、貨幣亦之力為ニ壅滯シ、農商交ニ困シマン、伏テ請フ、今ヨリ画シテ數回ヲ限リ本年七月ヨリ明年四月ニ至ラハ則折色本色ヨリモ便ナリト、上コレヲ嘉納アラセラル、十年詔シテ租額ヲ減シタマフ、佃戸田主ト訴フル者アリ、折半租ヲ減セント欲ス、内務省君ノ民政ニ老タルヲ以テ其ノ利害ヲ問フ、君其ノ不可ヲ論シテ曰ク、民間生ヲ營ム三ニ成ル、曰ク義務、曰ク契約、曰ク恩惠、民租ヲ官ニ納ムルハ義務ナリ、佃戸糧ヲ田主ニ収ムルハ契約ナリ、田主收糧ヲ減スルハ恩惠ナリ、然トモ糧ヲ減スルト否トハ事田主ニ関シテ而テ官ニ関セス、何トナレハ則田主ハ官ニ直接シテ佃戸ハ官ニ直接セス、今乃一概ニ之ヲ均クセント欲スルハ不可ナリ、夫レ人情利ヲ好ム、既ニ減租アリ、佃戸亦必ス糧ヲ減セント請フ、田主酌量シテ宜シキヲ制セハ勢必平準ニ帰セシ、幕府ノ時田制甚踈地ニ余弓アリ田ニ遺丈アリ、故ニ水旱風蝗民菜色ヲ免ル、ヲ得タリ、今ヤ尺地寸田稅セサルモノ無シ、凶歲ト雖トモ租ヲ逋ル、ヲ得ス、而シテ佃戸ハ則肯テ糧ヲ収メス、督促ニ遇ヘハ則其田ヲ返シテ耕サス、其レ民平年其利ヲ占ムルヲ得ス、歉歲何ヲ以テカ租ヲ納ムルヲ得ン、方今ノ制租ヲ逋ル、者官其地ヲ鬻キ以テ之ヲ完収ス、是豊年其ノ利ヲ佃戸ニ頒チテ凶年独其艱ヲ受ク、田主タル者亦難カラスヤト、事乃寢ム、十三年、大蔵省租限ヲ改メント欲シ、地方官ヲ集メテ之ヲ議ス、君之ヲ論シテ曰ク、租稅ハ收穫二本ツク、收穫ニ水陸ノ別アリ、今一例之ヲ徵セント欲ス、水田ノ租ハ七月ニ始マリ、陸田ハ則明年四月ニ至ル、緩急兩ナカラ失セリ、其前史ヲ檢スルニ、未タ租ヲ青苗ノ日ニ徵セシコトアラス、細民數金ノ利ニ頼リ、以テ活ヲ為ス、今此ノ輩ヲシテ未タ其ノ利ヲ収ムルニ及ハスシテ而シテ先ツ租ヲ収メシメハ其窮果シテ何如ソヤ、夫レ市街ノ利ヲ占ムル者毎月屋租ヲ収ム、而シテ其ノ稅ヲ収ムルハ則二季ニ在リ、農民何ノ辜ゾ、独收穫ノ前ニ徵セラル、ヤ、某謂ラク兩稅ノ期限皆收穫ヲ待チ、陸ヲ先ニシテ水ヲ後ニシ、務メテ民ヲシテ余裕アラシメント、省議之ニ從フ、是ヨリ先改祖令下ル、明治九年ヲ以テ期ト為シ、租額未タ定マラサルモノハ姑ク前年ニ準シ、法制立チテ後算定マルヲ待ツ、既ニシテ文出スル所ノ田多シ、加フルニ比年穀賤ナルヲ以テ所在租ヲ貢スル欠少、官乃令ヲ下シテ追徵ス、君書ヲ内務・大蔵二卿ニ致シテ曰ク、租ヲ改ムルハ事甚メテ重ク且ツ難シ、諸府県率ネ期ノ如クナル能ハス、某ノ管下ノ如キ期ヲ愆ルコト二年、少ク所一百五万円ノ多キニ至レリ、此皆新租ノ増ト米価ノ賤トニ由ル、實ニ已ムヲ得サル者、且ツ租額未タ定マラサル者、姑ク前年ニ依準スルハ則政府ト地方官トノ知ル所ニシテ、而シテ人民ノ未タ曾テ夢見セサル所ナリ、未タ曾テ夢見セサル所ノモノヲ以テ欠租トナシテ之ヲ今日ニ責ム、此レ所謂慢令期ヲ致ス者其ノ暴タル亦甚カラスヤ、今試ニ此ノ一百五万円ヲ以テ管下十八万戸ニ課スルトキハ、則戸六円ヲ出シ、諸ヲ人口百万ニ課スルトキハ則一人一円ヲ出ス、而シテ新租ノ増ス者三十万円之ニ附スルニ一百五万円ヲ以テス、民力何ヲ以テ之ニ堪ヘン、必ス之ヲ追徵セント欲セハ之ヲ地券ニ課セサルヲ得ス、而シテ田ノ定主ナキ売買換易變遷スルヲ知ラス、當時田ヲ買フ者、焉ソ知ラン他曰追徵ノ事アルヲ、買者之ヲ鬻者ニ責メ、鬻者之ヲ買者ニ諉テ、訴訟紛起セハ官將タ何ヲ以テ之ヲ断セン、抑々改租ノ九年ヲ以テ期トナスモノ成ヲ、当年ニ責ムル所以ニシテ今日追徵スルノ地ニ非ルナリ、某令ヲ奉セント欲セハ、則民ノ窮ヲ見ルニ忍ヒス、奉セザラント欲セハ則督責ヲ免カレス、進退惟谷マル、伏テ惟フニ聖上仁ヲ以テ天下ヲ御シタマヒ、二公碩德重望顯要ニ居セリ、必スシモ謂ハレ無

キノ徵發ヲ以テ斯民ヲ疚マササルナリ、書上ツル觀ル者嗟賞ス、官乃チ令ヲ下シ新租ノ増者五十年ヲ限リ課率未完徵シ、他府県之ニ準ス、嗚呼、君ノ民生ニ惓惓タル古循吏ノ風アリト謂フヘキ哉、君諱八翼、字八多助、字ヲ以テ行ハル、本氏八太田毛利氏ノ疏族ナリ、父諱八直猷、母八桂氏、周防吉敷郡二生レ、白根君諱八兼清ノ子トシ養フ所ト為ル、白根氏世々長門侯ニ仕フ、君美祿郡宰ニ任セラル、郡山谷ノ間ニアリ、民俗獷悍獄訟充斥、君諄諄訓誨風化大ニ行ハル、後大阪藩邸ニ祗役シ、財計國産ノ事ヲ掌ル、時ニ幕府政ヲ失シ、四方ノ志士尊攘ヲ唱フル者皆長門侯ニ倚リ重ヲ為ス、會ニ侍從中山忠光兵ヲ大和ニ拳ケテ克タス、大阪ニ走り長藩邸ニ投ス、君邸監穴戸真徵ト謀リ、密ニ舟ヲ以テ長門ニ護送ス、既ニシテ國ニ歸リ會計ヲ掌ル、藩主王事ニ勤メ屢々京師ニ朝シ繼クニ師旅ヲ以テス、用度浩繁國計殆ント支ヘス、君百方經營乏シカラサルコトヲ得タリ、藩主知事タルニ及ンテ擢テテ大屬ト為ス、君広額豐頤髯髯神ノ如ク、動止安詳、未タ曾テ疾言遽色セス、性寛洪慈祥人ヲ知テ善ク任シ、吏皆其職ヲ久シクス、其人ヲ用ウル多ク、諸ヲ管内ニ取リ、土農工商ヲ論セス才ニ隨テ任用ス、其來テ見ヲ請フ者胥吏諸生ト雖トモ必ス之ヲ便室ニ引キ茶ヲ供シテ對話シ、各其ノ言ハント欲スル所ヲ尽サシム、老生碩儒ヲ延キテ教學ヲ奨励シ、深ク近世生徒ノ輕佻傲慢常ヲ廢棄スルヲ憂ヒ、上書シテ之ヲ論ス、文部ノ教員令ヲ改ムルニ迫シテ、修身ヲ先ニシ忠孝ヲ重ンス、君ノ所見ト符ス、生徒病ヲ以テ医院ニ入レハ君必ス親シク往キテ之ヲ問フ、視ルコト猶子姪ノコトシ、十年西南ノ乱アルヤ壯兵ヲ募リ、勗ムルニ忠義ヲ以テシ、之ヲ遣ハス、其戰歿シタルモノニ八、碑ヲ立テ祭ヲ設ケ、其親戚故旧ヲ召シテ之ヲ慰藉シ、言淚ト与ニ下ル、坐ニ在ル者皆泣ク、管下皆君ノ篤実長者タルヲ知テ欺罔スルニ忍ヒス、府県會起ルヤ他府県議員見ル所多ク本案ト合セス、動モスレハ紛紜ヲ致セリ、独埼玉未タ嘗テ異議ヲ生セス、蓋人ノ君ヲ信スルノ深キナリ、君疾ヲ得テ医ニ東京ニ就クヤ、上屢々宮内卿ヲ召シテ其病ヲ問ハセタマフ、卒スルニ先ツ二月正五位ニ進メラレ勲四等ニ叙セラレ、十五年三月十五日卒ス、享年六十有四、前一日今ノ県令吉田君往キテ視ル、君懇々後事ヲ託シ、口言フ能ハサルニ至ル、猶胸ヲ指シテ之ヲ示シ、而シテ一言其私ニ及ハサリキト、配八白根氏七男ヲ生メリ、曰ク勝二郎家ヲ承ク警保局ニ官タリ、曰ク專一内務大書記官、曰ク忠三出テ、河野氏ヲ嗣ク群馬県警部長、曰ク清井関氏ノ養フ所ト為ル、余三子先タチテ歿シ、一女普喜齋ニ適ク、東京谷中墓域ニ葬ムルヲ賜フ、葬例ノ如シ、管下士民其德ヲ追慕シ香火絶エス、本県官吏ト謀リ碑ヲ氷川祠内ニ建テ、君ノ政績ヲ不朽ニ伝ヘント欲シテ事聞ユ、特ニ勅シテ内帑ノ金百円ヲ賜フ、諸子余ニ碑文ヲ属ス、辞スルコトヲ得ス、乃チ狀ニ抛リ詮次シ、之力銘ヲ系ス、君他ノ嗜好無シ、時々和歌ヲ詠ス、其集ヲ梅園余香ト曰フ、或ハ山水及花卉ヲ画キ、以テ自ヲ娛シム、故ニ銘詞ニ云ハク

明治十八年三月

太政大臣兼修史館總裁從一位大勲位公爵三条実美篆額
編集副長官兼東京大学教授從五位勲六等重野安繹 撰
正五位日下部東作書
広群鶴鐫字

「特別大演習（栃木）贈位関係書類」埼玉県行政文書 大八七八から



埼玉県令白根多助記念碑拓本（縮小印刷）
新井(伏)家 26618

白根県令も仲立ちした

群馬県令楯取素彦と久坂文の再婚

〔当館収蔵の白根家文書の手紙から〕

95 白根家文書一〇 楯取素彦書簡 今晚面会御断 十月二十一日
白根多助宛

今日八当駅御来着之由、早速御手書并御土産御持せ被下、御芳情深奉謝候、今晚御見舞申度途中迄罷出候処、昨今少々心配二相成候件有之、彼是二而来客、終二引返シ、今晚八御無沙汰可仕候、明日午後より茶会之様ナルモノヲ以テ御案内申度、御夫婦様ニテ水辺小亭江御来賁ヲ願候積リ、孰明朝八参堂可仕候得共、先八御見廻御断ハリ旁、草々如此候、頓首 十月二十一日 素彦 白根様座右

* 白根夫妻と楯取との親しい関係がわかります。

96 白根家文書一 楯取素彦書簡 杉民治東京迎入ノ件 明治十四年六月二十三日 白根多助宛

御紙上拜見、瀧口書状符合、多分成就之時機到来スルナラン、切、素彦二異議無之段ハ、御序之節民治迄被仰越候テモ宜候得共、只決議之未本人ヲ東京迄迎候辺、能々順序ヲ尽シ不申テハ不相叶、此二八彼民治妹一旦次男許ヲ立去リ、帰萩ハ於本人二情実有之積リ、次男道明夫婦之間二聊不叶ヲ生シ候哉之様子、是ニテ次男ト杉トノ間生涯之不都合ヲ可生ト懸念之折柄ニ付、旁民治妹も素彦手許ニ添候上は治療之方略も有之、随分和諧方八行届力セ可申候、只々其間多少之順序ヲ経不申テハ、又候父子之間ニマテ如何様之疑心ヲ起シ可申も難測、その次第八尚御面談二尽シ可申候、兎二角異議ハ無之、只本人ヲ迎へ候期限ヲ追テ取極メ候事ニ御含可被下候、書面御一見後、御火中奉希上候、草々不備 六月二十三日 素彦 白根様 内覧侍史（封筒表 湯島梅園町一番地 白根崎玉県令殿 親展（封筒裏 靴町平河町六丁目二十一番地 楯取素彦（消印 東京 に・一四・六・二三

* 楯取は文との再婚を決意しましたが、それにより杉民治と次男道明の関係が悪くなることを心配しています。読後の焼却も望んでいます。

97 白根家文書四〇六 民治書簡 縁談ニ付 明治十四年七月十三日 白根多助宛

先月廿四日之御状相達難有奉拜見候、一時は大分之御気分相二も有之たる由之処、頓二御平快一段之御事奉恭賀候、御病後別して御大事御加養奉祈上候、于時瀧口吉衛出京御伺仕由、其節楯取後縁之儀ニ付被仰聞之旨有之由、吉衛帰着、翌日私儀山口方角より帰り懸ケ彼方江立寄り、御内意之旨敬承仕御深切之儀於私意存無之、楯取ト之因みも薄く不相成、子供之為二も可然間近く、私妻死去之跡江も先妻之妹を迎へ、安心之覚へも有之、旁可然と考へ、卒爾二同意之段、吉衛江申聞せ候処、直様電報を以其段申上候由、其後吉衛儀私方江来り候節ハ、途中二而一面仕、留守江参り候由二御座候、然処、久坂妹江入二申聞せ候処、素より申聞せ候迄も無之、彼方希家も小田村の惣領、此二十人並二も無之、姉も心二懸り居可申二付、世話致し上候、当人も難儀少く、亡姉江対し而も深切も届キ可申、惣して内輪之話世話も可成文ケ心を尽し、少しなりとも浪費を減し候様相成、第一素彦兄之心痛之少く、祈奠之減し候様致し候ハ、是迄も大井二厄害二相成居、此後も久坂秀次郎引立二相成候為二も、何も宜敷事二而、即席二而御受申出、不行届は致方無之候へ共、力有文ケハ尽し不申而は不相濟事と申儀は百も弁へ居候へ共、いかにも是迄再び嫁入と申事ハ致間敷と決心仕居候素志を變し候事、今更甚六ツケ敷、いか様思ひ替へ候而も御受出来不申と申候事ニ付、達而ト圧到する程理も無之、甚困迫仕候、就而は他二宜敷事を聞出し度、弥以人江も頼置申候、尊台二もケ様御深切被思召被下候事ニ付、何卒乍此上他江宜敷御気付被仰聞被下候様奉願上候、楯取も両家となし、浪費も多ク、孰れ慥なる嫡妻無之而は半季渡りの妾位二而は家政向迎も届キ申間敷存候、私ども弥手弘く聞合せ可申候へ共、乍此上宜敷様奉願上候、旁一応之御礼、尚久坂妹之意内是非御断申出候心底をも早速可申上筈之処、吉衛儀も此内は私留守ニ付、重而早速可参と留守江申置候由ニ付、彼者参り候ハ、尚彼者江も申合せ候而御意可申上と一日〳〵と延引二相成、甚以失敬之至万々奉恐入候、兎も角も御深切之思召は深く奉感謝候、三百里外よりは中々届キ兼候付、御手近之場処より何卒御氣を被就被下候

様、乍此上奉願上候、先は御礼御断旁々頓首百拜 七月十三日 民治白根令公閣下 追而御病後一人御気躰甚暑二も向ひ御自愛專一二奉存候 * 楯取の決意を聞いた杉家は大喜成でしたが、文は頑なに再婚を拒みます。民治は楯取の近くに居る白根県令に助力を願いました。

98 白根家文書一 楯取素彦書簡 高崎士族の動向 明治十四年八月九日 白根多助宛

甚熱難凌候処、弥御揃御万福奉賀候、近来御病症如何二候哉、心外之御無沙汰背本意二候、此節御聞及二可相成、管下高崎士族共同駅商人ヲ煽動紛議ヲ起シ、格別心配二涉ル程之事も無之候得共、何分聞分無之ニ八入り入申候、萩表杉民治迄御懸合一條如何相成候哉、御病中口氣やかま敷候得ハ、己二其発言ヲ御煩ハセ申候以上八小生より直接二文通仕候様致度、必又深く御配慮被下間敷候、県下赤城牧社二而製候粉牛乳六瓶、馬車便呈上、御笑留可被下候、生乳御用之際乾乳ヲ呈候ハ不都合二候得共、陸軍病院杯乳質之精良ナル由ヲ以、毎々需求二預り候故差出申候、御試可被成候、時下万々御大切御養生奉專禱申候、先八御見廻迄、草々如此候、頓首 八月九日 素彦 白根様侍史 二白、奥方様二も宜敷御鶴声可被下候、以上（封筒表 東京都湯島梅園町式番地 白根崎玉県令殿 親展（消印）東京一四・八・一〇（封筒裏 羣馬県前橋 楯取素彦 八月九日拜（消印）前橋八・九

* 楯取は再婚の労を取ってくれる白根の病状を心配して、自分が直接杉民治と文通すると申し出ています。また、赤城牧社の粉ミルクを見舞いに届けています。高崎士族の紛議にも触れています。

99 白根家文書一三 楯取素彦書簡 高崎士族騒動 明治十四年九月三日 白根多助宛

朝夕八少々凌能相成候処、御病状如何御座候哉、先ツハ御平穩之様二も承り、御療養此際別し而御大切と奉存候、過日八瀧口吉右衛門電信ヲ御示シ被下、彼方相談振相調候趣、尚昨日民治より去月二十四日附書状差送り、本人納得候由ヲ報シ越候、即民治より尊台江八直子ニ御答申出候トノ事、御病中種々御手数数ヲ相掛候段奉恐入候、今後八幸便ヲ聞繕、本人ヲ出京為致可申、最早御心配被下間敷候、先八此ノ件得尊意度、過日之御答旁、草々如此候、頓首不備 九月三日 素彦 白根明府尊下 追申、御療養幾重二も御手抜き無之様專祈仕候、乍末筆御家族様方二も宜敷御致意可被下候、以上、管下高崎一件も、今日ニテ八泣寝入り之姿、一時八内務省直訴云々申触候処、右ヲ八変換、上等才判ニテ、彼等書面二附箋之廉不伏ヲ訴候手筈ニ致候哉之趣、もはや格別之事も有之間敷、尤貧窮士族之有ン限り八面倒ノ絶間ハ有之間敷乎、是二八困りものと奉存候、以上 素彦 白根様（封筒表）東京湯島梅園町式番地白根崎玉県令殿 親展（消印）東京一四・九・四（封筒裏）九月三日発 群馬県前橋 楯取素彦

* 杉民治は八月二十四日付の手紙で、文が再婚を納得してくれたことを楯取に知らせてきました。楯取は、病中に手数をかけた白根に感謝を述べています。別紙では高崎士族の動きが収まったことを知らせています。

100 白根家文書二一 杉民治書簡 御尊父逝去ノ悔 明治十五年三月二十六日 白根勝二郎宛

一筆啓上仕候、御尊父様御事御気分相遂に御療養相叶ひ不被成御遠行被成候由御知らせ之旨、奉敬承驚入仰天仕候、次第二春暖二も向ひ候儀ニ付、定而追々御平快二可被為向と而已奉存居、御見舞状も不全御無礼仕候処、実二当惑至極奉存候、嗚々於御引受は御愁傷可被思召、御胸中之程奉恐察上候、私共数十年來之御引立二預り、実二骨肉同様二奉存候儀二而有之、近頃ハ書状之御往復等八御無礼勝二打過候へ共、爰許二而も旧來之心知連中相對候節ハ、本 御尊父様之御話申上候、近年出府仕候節は又旧の如く御懇切御待遇被成下、一人御旧誼を奉感、又去年は楯取後縁一件ニ付而も色々御配慮被成遣、彼是と一層御旧誼を奉感候折柄、誠二力を落し申候、右御悔為可申上如斯御座候、御母君様江も御同様御悔被仰上可被下候、奉願上候、恐惶謹言 三月廿六日 杉民治 白根勝二郎様 御香典乍恐御仏前端江御備被下度奉願上候

（封筒表）東京湯島梅園町二番地 白根勝治郎殿 杉民治 急（印）風波 延着（消印）萩 長門・阿武・三・三一（封筒裏）長洲萩松本より（消印）東京一五・四・六

* 白根多助と杉家の人々の数十年來の交際が窺えます。民治は、亡くなった白根が再婚に配慮してくれたことに対して、子息勝二郎に感謝の意を述べています。（翻刻：埼玉県立文書館 史料編さん担当 芳賀明子）